

正法寺跡・大上遺跡 発掘調査概要

—— 四條畷市清滝所在 ——



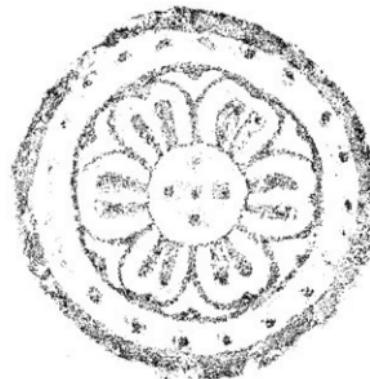
1999年3月

四條畷市教育委員会

正法寺跡・大上遺跡

発掘調査概要

—— 四條畷市清滝所在 ——



1999年3月

四條畷市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、四條畷市教育委員会が平成9年度国庫補助事業として計画、実施した発掘調査事業及び開発による原作者負担で実施した発掘調査事業と平成10年度国庫補助事業として計画、実施した発掘調査事業の概要報告書である。
- 2 平成9年度事業は、大阪府教育委員会の助言を得て、四條畷市清滝所在の正法寺跡において平成9年12月10日に着手し、平成10年2月4日に終了した。
- 3 調査は、四條畷市教育委員会歴史民俗資料館（現在四條畷市教育委員会生涯学習推進室）技師 村上 始を担当者とし実施した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者の権現領 一馬氏・木村 俊造氏・田中 龍蔵氏・木村 博之氏の御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。
- 5 調査補助については中西 貞子・岩井 二美が、出土遺物の整理・実測については村上 始・萬谷 満子・小川 智恵子・橋本 真紀・佐藤 華子が行なった。
- 6 本書の執筆は村上 始が行なった。
- 7 平成10年度事業は、四條畷市清滝所在の大上遺跡において平成10年11月1日に着手し、平成11年3月31日に終了した。
- 8 調査は四條畷市教育委員会 主任技師 野島 稔を担当者とし実施した。
- 9 発掘調査の実施にあたっては、浦川 秀一氏のご協力を得た。厚く感謝の意を表したい。
- 10 調査補助及び出土遺物の整理・実測については、谷本 由紀・佐野 喜美・田伏 美智代・斎藤 佐智子・北井 志穂が行なった。
- 11 本書の執筆は野島 稔が行なった。

本　文　目　次

はしがき

例　　言

第1章　遺跡の位置と歴史的環境	1
第2章　調査の成果	3
第3章　まとめ　報告書抄録	24
第4章　大上遺跡　歴史的環境と調査の成果	27
図　　版	

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

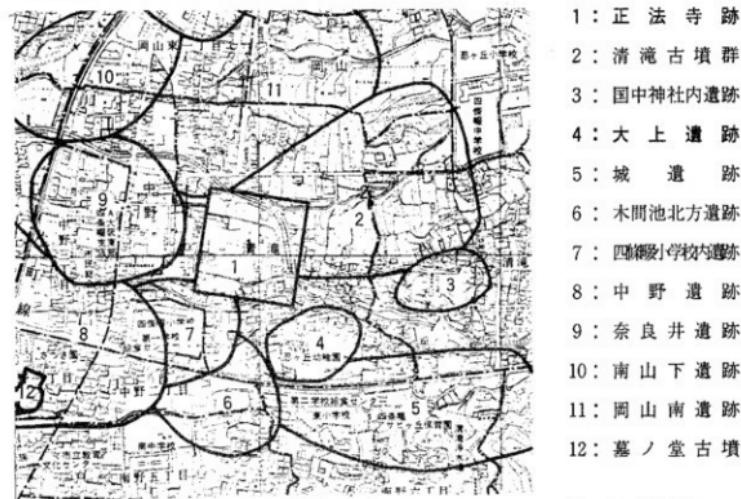
正法寺跡は、生駒山系の西側斜面から派生する清滝丘陵上の四條畷市大字清滝に所在する。当遺跡として周知されている約210m四方の台地上には水田が広がっていたが、現在はその中央より西側に主要地方道枚方・富田林・泉佐野線が南北方向に通じており、宅地開発も一部で行なわれている。この台地は周辺より約30m程高くなっている、南側斜面下には東西方向に清滝街道が、西側斜面下には南北方向に東高野街道が通じている交通の要衝の地である。

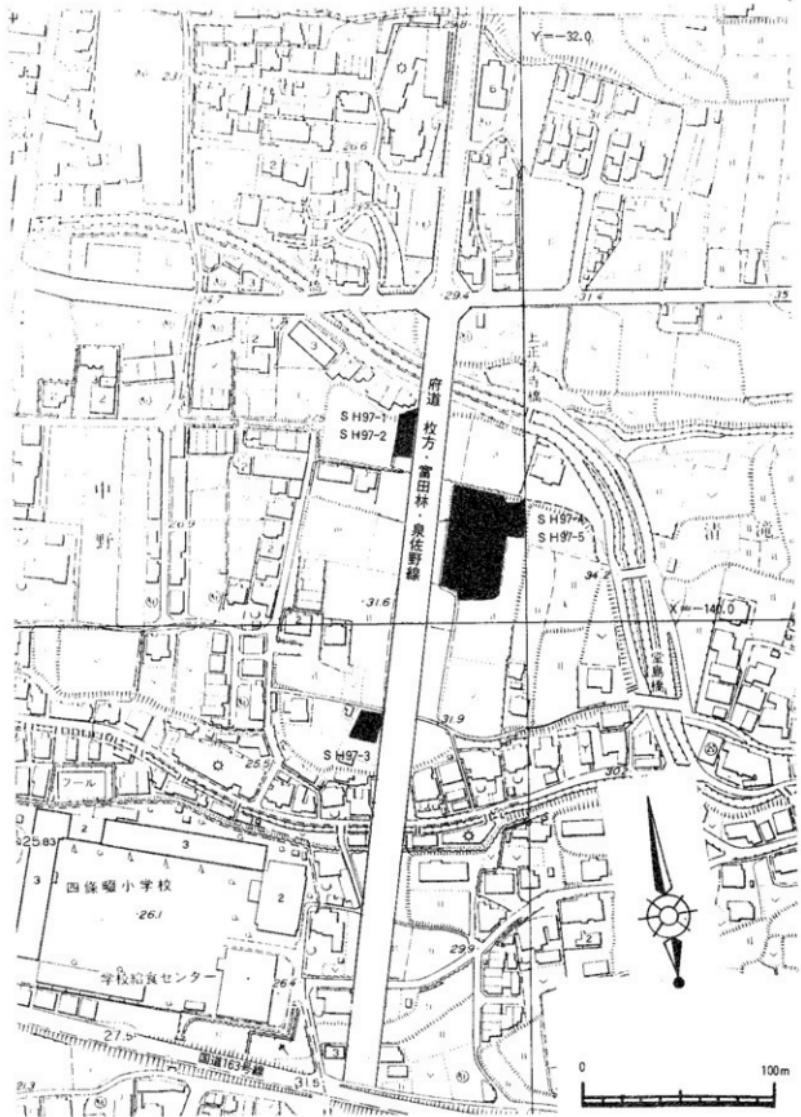
正法寺の歴史については、昭和44年度・平成5年度の大坂府教育委員会による発掘調査や平成8年度の四條畷市教育委員会による発掘調査などによって明らかにされてきた。その詳細についてはそれぞれの概要報告書を参照されたい。

当寺院は過去の発掘調査で白鳳時代に創建され、寺勢は衰えながらも室町時代頃まで当地に存在していたことが判明している。

周辺の遺跡としては、同じ丘陵上の北東隣には古墳時代後期の清滝古墳群があり、南側には四條畷小学校内遺跡・大上遺跡・木間池北方遺跡・城遺跡が分布している。最近の発掘調査では、これらの遺跡から奈良時代や平安時代の遺構が多く発見しており、正法寺と同時期の集落跡であると考えている。特に木間池北方遺跡では、河川から奈良時代の陶硯などと共に水辺祭祀に使われたと思われる土馬が7体、井戸から「…万呂」と墨書きされた土器が出土している。

(第1図)





第2図 調査区配置図

第2章 調査の成果

今回発掘調査を行った地区は3箇所である。それぞれの箇所での開発は、遺跡を破壊しない工事方法であったが、基本層序と周辺地区で確認された遺構との関連を確認するために国庫補助事業としてトレンチ調査を行った。ただし2箇所の地区においては、一部遺跡を破壊するところがあるため、その部分については原因者負担で発掘調査を行った。各調査地区については便宜上、次の記号で呼ぶこととする。(第2図)

大字清瀧366-1（権現領一馬氏所有地）…SH97-1（国庫補助事業）・SH97-2（原因者負担）

大字清瀧445-3（木村 俊造氏所有地）…SH97-3（国庫補助事業）

大字清瀧381（田中 龍蔵氏所有地）…SH97-4（国庫補助事業）・SH97-5（原因者負担）

大字清瀧385-1（木村 博之氏所有地）…SH97-5（原因者負担）

第1節 SH97-1・SH97-2地区の発掘調査（第3～5図・図版1・2・5・8）

現状は、水田であった所に府道敷きまで盛土を行い宅地造成が計画された。宅地予定地（SH97-1地区）は盛土が厚く遺跡の破壊はないが、基本層序と東側の府道新設工事に伴う発掘調査で大阪府教育委員会が報告されている遺構との関連を確認するために国庫補助事業としてトレンチ調査を行った。また周囲の擁壁予定地（SH97-2地区）は遺跡を破壊するため、原因者負担で発掘調査を行った。

（1）基本層序（第5図）

SH97-1地区は、約1.3mの盛土・約20cmの耕土・約10cmの床土を除去すると、3層に分かれる約20cmの遺物包含層が堆積し、その下層の地山（しまりの強いにぶい黄色砂質土）が遺構面であった。

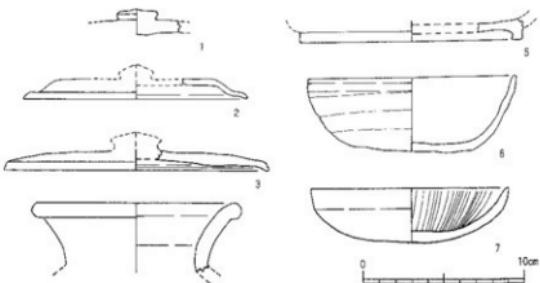
SH97-2地区は、約30cm～1mの盛土を除去すると部分的に約20cmの耕土と約10cmの床土がみられ、その下層には10層に分かれる約60cm～1mの遺物包含層が堆積している。遺構面は同じくしまりの強いにぶい黄色砂質土の地山である。

（2）遺構

SH97-1地区（第5図・図版1）

幅2.3m・長さ17mのトレンチを設定して調査を行った結果、TP+30.300～30.400m付近で南北方向の溝6本・東西方向の溝6本とピット8基・土坑2基を検出した。東西方向の溝7・8・11に関しては、前回（平成5年）と前々回（昭和44年）の大阪府教育委員会の調査において確認されている遺構の続きである。それぞれ東から西方向への幅約0.5～1m・深さ約10～30cmの自然溝である。溝2・5・11からは、それぞれ奈良時代のものと考える須恵器坏・土師器

塊・土器器坏が出土している。南北方向の溝に関しては、出土遺物がなく時期の特定はできない。ピットに関しては出土遺物がなく時期は特定し難い。また前回と前々回の調査結果と照し合わせたが建物の復元はできなかった。



第3図 SH97-1地区 出土遺物

SH97-2地区（第5図・図版2）

擁壁予定地である北側と西側にトレンチを設定した。北側のトレンチにおいては、大阪府教育委員会が平成5年に調査をした際に検出している階段状に整形された斜面の続きを確認した。ただし今回のトレンチの範囲内では、斜面を取り巻いていたと考えられている石積みは検出しなかった。西側のトレンチにおいては、中心から東側の幅約50cm程が平坦な遺構面で、西側は緩やかな斜面となっていた。この斜面は近世以降の棚田状の耕作地の法斜面であると考えられ、その斜面下からはこれを保護するための石積みを検出した。平坦面では、SH97-1地区の遺構面と比較すると約30~40cm低いTP+30m付近で、ピット5基・土坑2基・溝1本を検出したが、これらの遺構の一部は、その斜面形成時に破壊されている。出土遺物が少なく時期は特定できない。

(3) 遺 物

◇土器類（第3図・図版5）

1~4を含み多くの土器類が包含層からの出土である。図示できたもの以外には中世から近世の陶磁器が出土している。

須恵器

- | | |
|-----------------|----------------------------------|
| 坏蓋（第3図-1・図版5-1） | 擬宝珠つまみが付く蓋の小片である。胎土は密である。 |
| 坏蓋（第3図-2・図版5-2） | 復元口径14.1cmの口縁部小片である。胎土は密である。 |
| 坏蓋（第3図-3・図版5-3） | 復元口径16.5cmの小片である。胎土は密である。 |
| 甕（第3図-4・図版5-4） | 復元口径12.4cmの小片である。胎土は密である。 |
| 坏（第3図-5・図版5-5） | 復元底径13.8cmの小片である。胎土は密である。溝2から出土。 |

土師器

塊 (第3図-6・図版5-6) 平底気味の底部からやや外上方へ伸び口縁部にいたる器形で、外面には幅約1cmの粘土紐痕がみられる。口径12.9cm・器高4.6cm。1/2残存。溝5から出土。

坏 (第3図-7・図版5-7) 丸底の底部からやや内傾しながら口縁部にいたる器形で、内面の口縁端部から底部にかけて一段の放射状暗文を施す。胎土はやや粗い。口径12.2cm・器高3.3cm。完形品である。溝11から出土。

◇瓦類 (第4図・図版8)

今回の調査では遺物のほとんどが瓦類であった。すべてが包含層からの出土である。平瓦が多数をしめ、丸瓦は少量、軒瓦は全く出土しなかった。叩き具は数種類ありそれぞれの事例を図示した。

平 瓦

第4図-8 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は8本・横糸は9本である。凸面には繩の幅が約2.5mmの繩目叩き痕がみられる。

第4図-9 凹面の布目痕は摩滅により不鮮明、凸面には繩の幅が約3mmの繩目叩き痕がみられる。

第4図-10 (図版8-10) 凹面の布目痕は摩滅により不鮮明、凸面には繩の幅が約3.5mmの繩目叩き痕がみられる。繩の原体は左燃りである。繩目叩きがみられる瓦のなかで左燃りのものはこの1点のみである。

第4図-11 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は5本・横糸は7本である。凸面には繩の幅が約3.5mmの繩目叩き痕がみられる。

第4図-12 凹面の布目痕は摩滅により不鮮明、凸面には繩の幅が約4mmの繩目叩き痕がみられる。

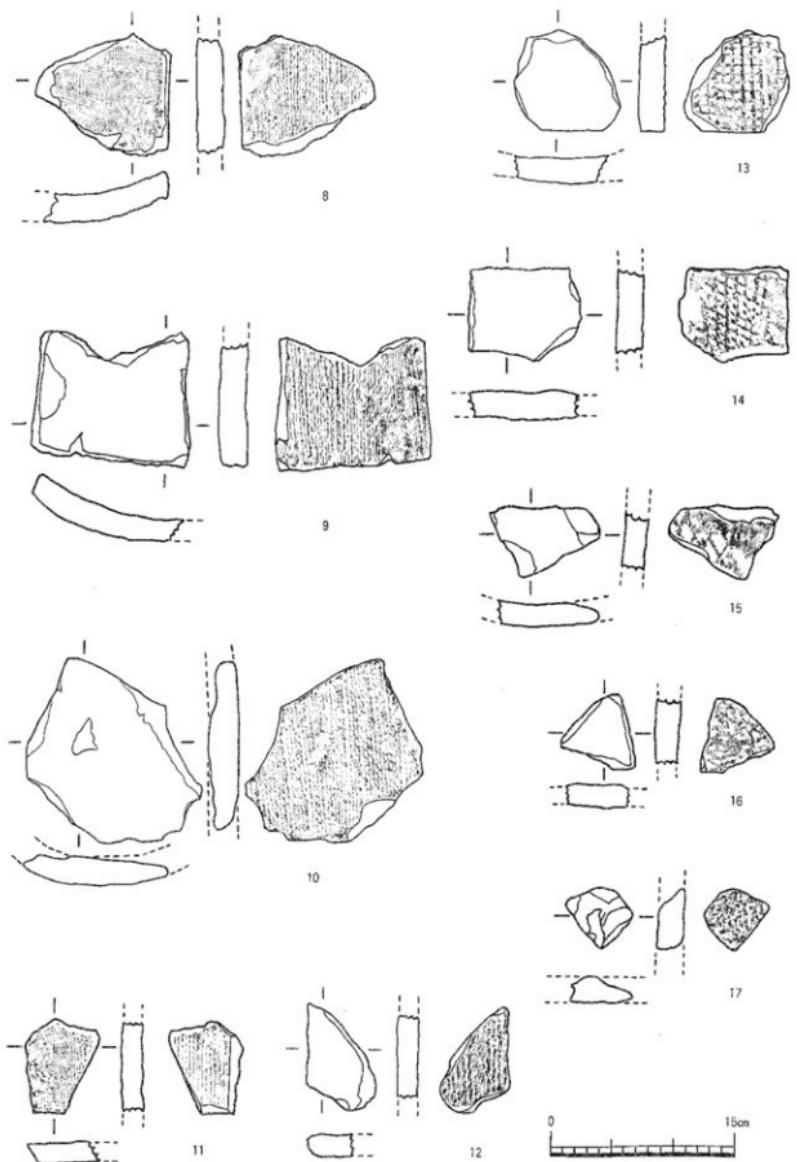
第4図-13 凹面の布目痕は摩滅により不鮮明、凸面には一辺約5mmの正格子叩き痕がみられる。

第4図-14 凹面の布目痕は摩滅により不鮮明、凸面には一辺約5mmの斜格子叩き痕がみられる。

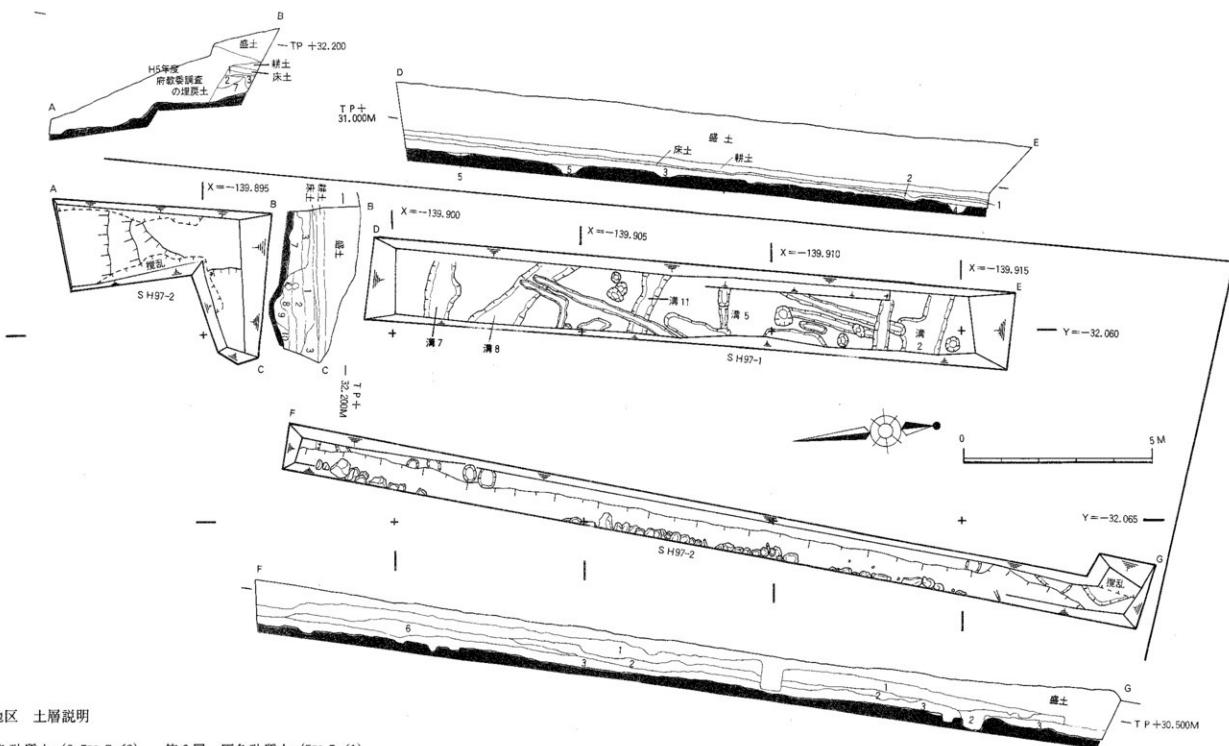
第4図-15 凹面の布目痕は摩滅により不鮮明、凸面には一辺約1.5cmの斜格子叩き痕がみられる。

第4図-16 凹面の布目痕は摩滅により不鮮明、凸面には不定形の叩き痕がみられる。

第4図-17 凹面の布目痕は摩滅により不鮮明、凸面には粗と思われる種子の圧痕がみられる。



第4図 SH 97-1・2地区 出土遺物



S H97-1 · 97-2地区 土層説明

- | | | | |
|-----|-------------------|------|-------------------------|
| 第1層 | 灰黄色砂質土 (2.5Y 7/2) | 第6層 | 灰色砂質土 (5Y 5/1) |
| 第2層 | 灰色砂質土 (5Y 6/1) | 第7層 | にぶい灰黄色砂質土 (2.5Y 6/4) |
| 第3層 | 黄灰色砂質土 (2.5Y 5/1) | 第8層 | 第1層に灰白色細砂 (7.5Y 8/1) 混入 |
| 第4層 | 灰白色粗砂 (5Y 7/1) | 第9層 | 灰色粘質土 (N 5/) |
| 第5層 | 灰色粗砂 (10Y 6/1) | 第10層 | 灰色砂質土 (N 6/) |

第5図 S H97-1 · 2地区 遺構平面図、壁断面図

第2節 SH97-3地区の発掘調査（第6～11図・図版3・5・6・8）

現状が畑地である地に保育所の建設が計画された。建設工事による遺跡の破壊はないが、基本層序と東隣で検出されている遺構との関連を確認するために国庫補助事業としてトレンチ調査を行った。

（1）基本層序（第7図）

SH97-3地区は、約20cmの耕土・約5～10cmの盛土・約10cmの床土を除去すると、16層に分かれる約20cm～1.3mの遺物包含層が堆積し、その下層の地山（しまりの強い灰褐色細砂）が遺構面であった。

（2）遺構（第6図・図版3）

今回の調査では、敷地の北側に東西方向の幅約3.5m・長さ約6mのトレンチ、南側に東西方向の幅約3.5m・長さ約11.5mのトレンチ、その2箇所をつなぐように南北方向の幅約2.5m・長さ約6.5mのトレンチを設定した。南側のトレンチにおいてはTP+31m付近が遺構面である。この遺構面は、南北方向のトレンチの南端で約30cm程の段をもって高くなっている。よってこのトレンチと北側のトレンチの遺構面はTP+31.3m付近である。

南側トレンチの南東側で深さ約2.5mの落ち込みを検出した。これは大阪府教育委員会が前回及び前々回の調査で検出したものの続きである。この落ち込みの肩部は、東側から直線的に西へ延びてきているが、今回のトレンチ内で弧を描くようにその方向を南へ変えている。これは前回の調査概要報告書で述べられているように、この台地の本来の南端であると考える。この落ち込みからは青磁碗や土師器羽釜のほか多量の瓦類が出土している。以上のほかには北側のトレンチにおいて土坑1基、南北方向のトレンチにおいて溝1本、南側のトレンチにおいて溝4本・ピット2基を検出した。溝2・土坑1からは瓦が出土している。

（3）遺物（第8～11図・図版5・6・8）

◇土器類（第8図・図版5）

土器類の多くが落ち込みからの出土である。図示できたもの以外には近世の陶磁器が出土している。

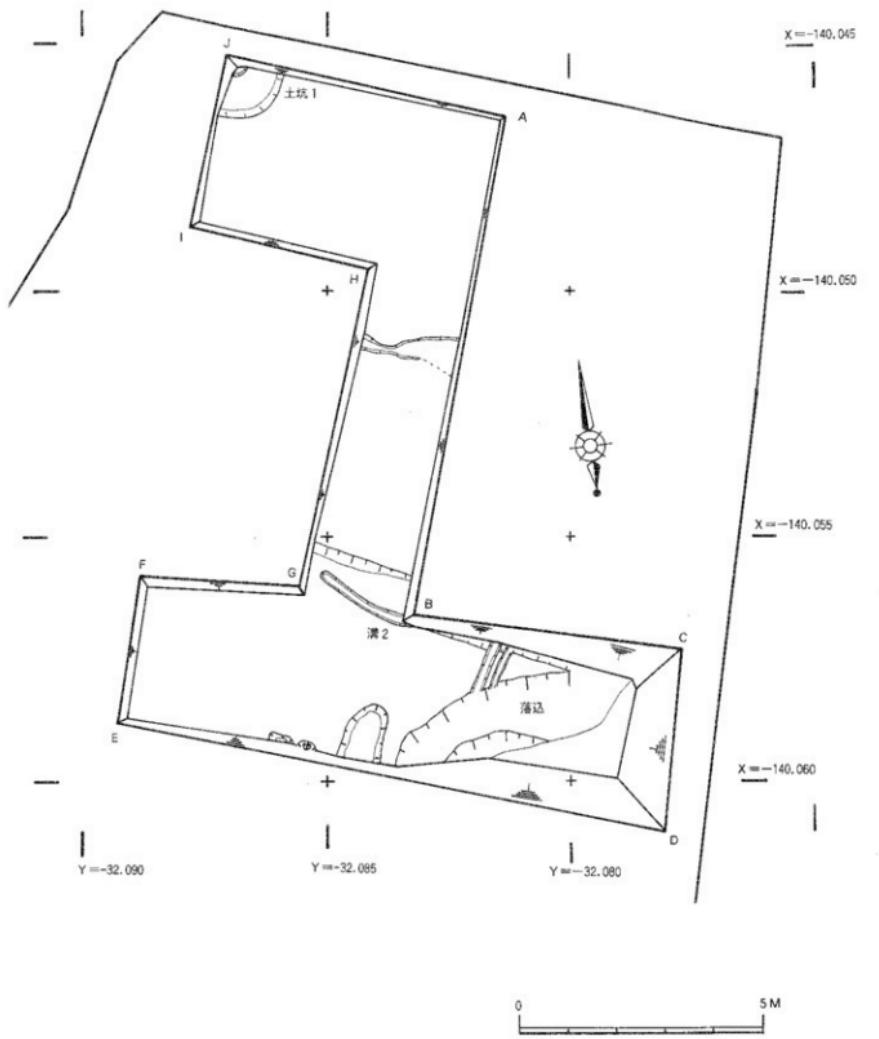
磁器

白磁碗（第8図-18・図版5-18） 復元口径9.6cmの小片である。包含層から出土。

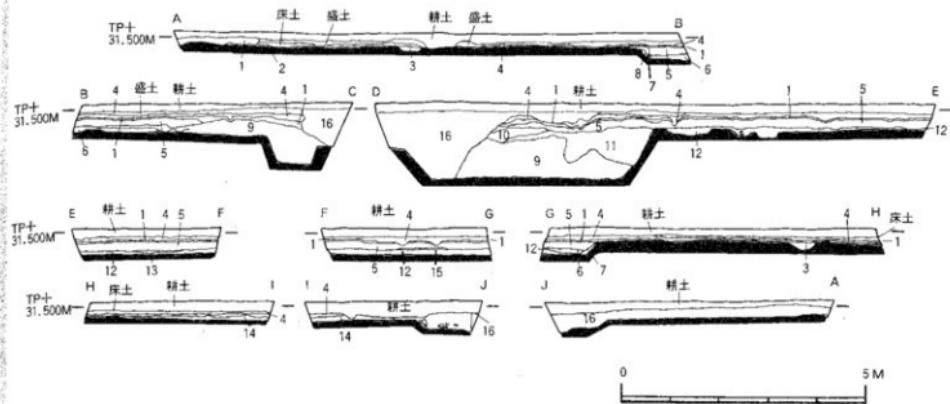
青磁碗（第8図-20・図版5-20） 復元口径15.6cmの小片である。落ち込みから出土。

土師器

小型羽釜（第8図-19・図版5-19） 復元口径10.6cmの小片である。鍔は貼り付けで、高さは0.8cmである。体部内面には、横方向の粗いハケメ調整が施されている。落ち込みから出土。



第6図 SH97-3地区 遺構平面図



第7図 S H97-3地区 壁断面図

S H97-3地区 土層説明

第1層 黄橙色砂質土 (10YR 7/8)	第9層 暗灰色砂質土 (10YR 5/1)
第2層 灰褐色細砂 (7.5YR 6/2)	第10層 暗灰色砂質土 (10YR 6/1)
第3層 灰白色粗砂 (2.5Y 7/1)	第11層 5層に多量の焼土・炭化物が混入
第4層 灰色砂質土 (5Y 6/1)	第12層 暗灰色砂質土 (7.5YR 5/1)
第5層 黄灰色砂質土 (2.5Y 5/1)	第13層 灰色砂質土 (7.5Y 6/1)
第6層 灰色砂質土 (N 5/)	第14層 淡黄色砂質土 (2.5Y 8/4)
第7層 灰白色砂質土 (5Y 7/1)	第15層 にぶい黄橙色粘質土 (10YR 7/2)
第8層 灰白色砂質土 (N 7/)	第16層 撤乱

鉄器

釘（第8図-21・図版5-21） 鉄釘の頭部分である。瓦留め用の釘と思われる。落ち込みから出土。

◇瓦類（第9～11・図版6・8）

今回の調査では遺物のほとんどが瓦類であった。その多くは落ち込みからの出土であり、平瓦が多数をしめ、丸瓦は少量、軒丸瓦は6点、軒丸瓦は1点出土した。平瓦に使用された叩き具は数種類ありそれぞれの事例を図示した。そのほか埠が3点出土している。

軒丸瓦

第9図-22・23(図版6-22・23) 複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部である。外圈には凸状の鋸歯文が巡り、その内側には珠文が巡っている。瓦当部の復元直径は2点とも17.6cm、厚さは1.4cmである。落ち込みから出土。

第9図-24(図版6-24) 蓮華文軒丸瓦の瓦当部の小片である。外圈には凸状の鋸歯文が巡り、その内側には珠文が巡っている。瓦当部の厚さは1.4cmである。落ち込みから出土。

第9図-25(図版6-25) 複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部である。中房には1+4の蓮子を配し、外圈には20個の珠文が巡っている。瓦当部の復元直径は16cm、厚さは上方で4cm、下方で2cmである。落ち込みから出土。

第9図-27(図版6-27) 単弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部である。外圈には珠文が巡っている。瓦当部の復元直径は15cm、厚さは2.4cmである。落ち込みから出土。

第9図-28(図版6-28) 単弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部の小片と思われる。外圈には凸状の鋸歯文が巡り、その内側には珠文が巡っている。瓦当部の厚さは1.4cmである。溝2から出土。

軒平瓦

第9図-26(図版6-26) 均整唐草文軒平瓦の瓦当部である。無頸の軒平瓦で、外圈には3重の圓線が巡っている。厚さは4.4cmである。落ち込みから出土。

平瓦

第10図-32(図版8-32) 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は7本・横糸は7本である。凸面には縄の幅が約2.5mmの縄目叩き痕がみられる。凹面の一部にはカキメ状の痕がみられる。落ち込みから出土。

第10図-33(図版8-33) 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は11本・横糸は9本である。凸面には縄の幅が約3mmの縄目叩き痕がみられる。落ち込みから出土。

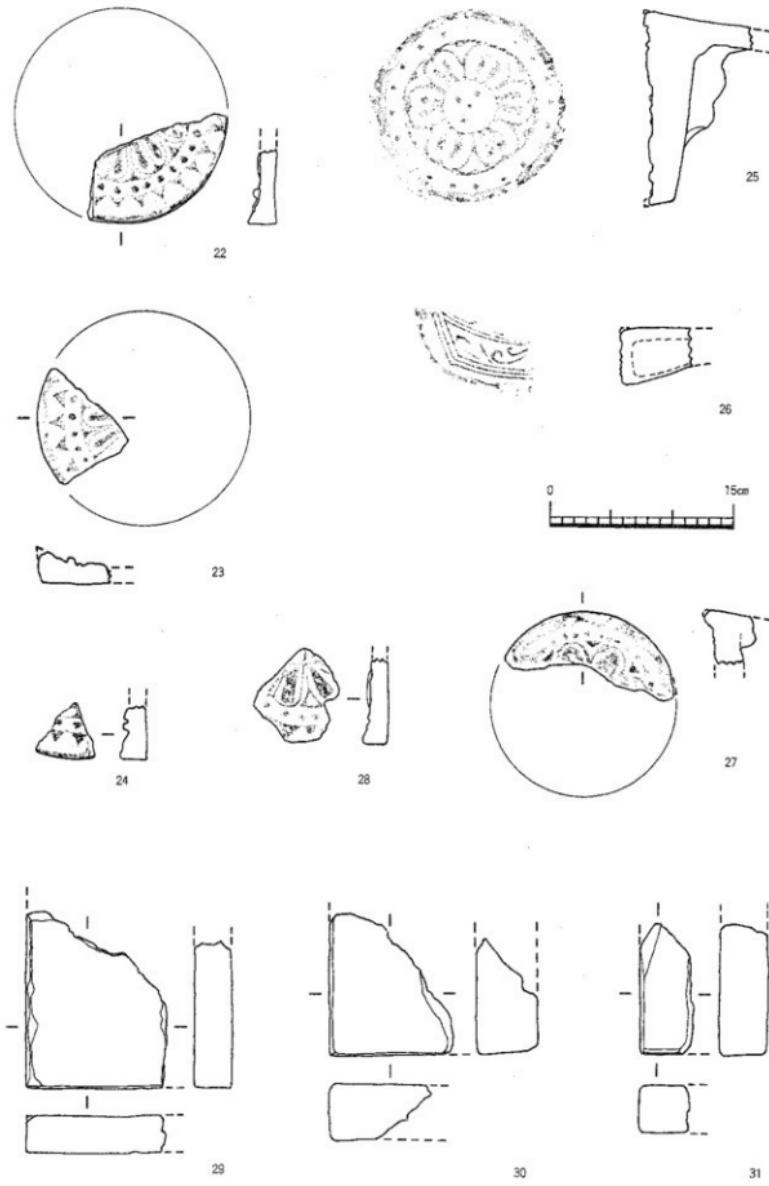
第10図-34(図版8-34) 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は7本・横糸は8本である。凸面には縄の幅が約4mmの縄目叩き痕がみられる。落ち込みから出土。

第10図-35(図版8-35) 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は8本・横糸は10本である。凸面には縄の幅が約5mmの縄目叩き痕がみられ、初と思われる種子の圧痕がある。落ち込みから出土。

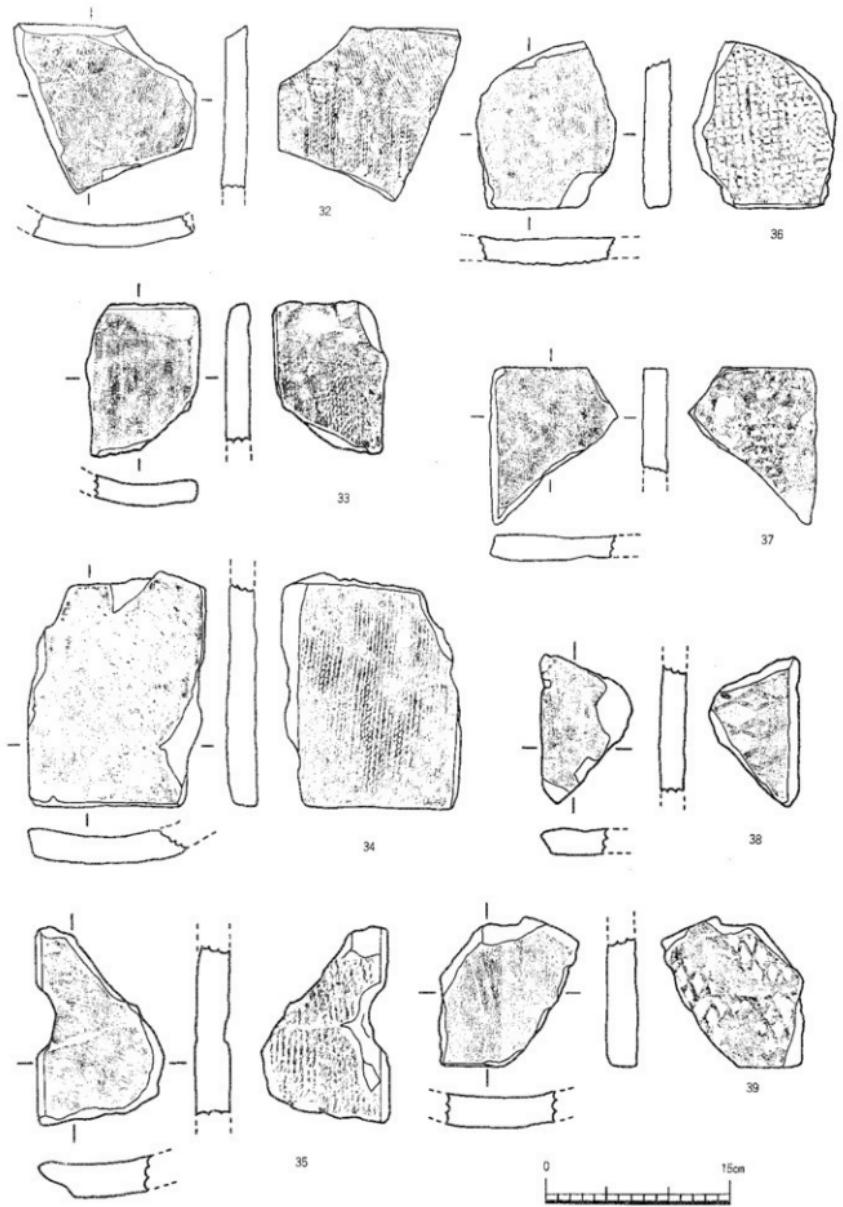
第10図-36(図版8-36) 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は7本・横糸は8本である。凸面には一辺約5mmの正格子叩き痕がみられる。落ち込みから出土。

第10図-37

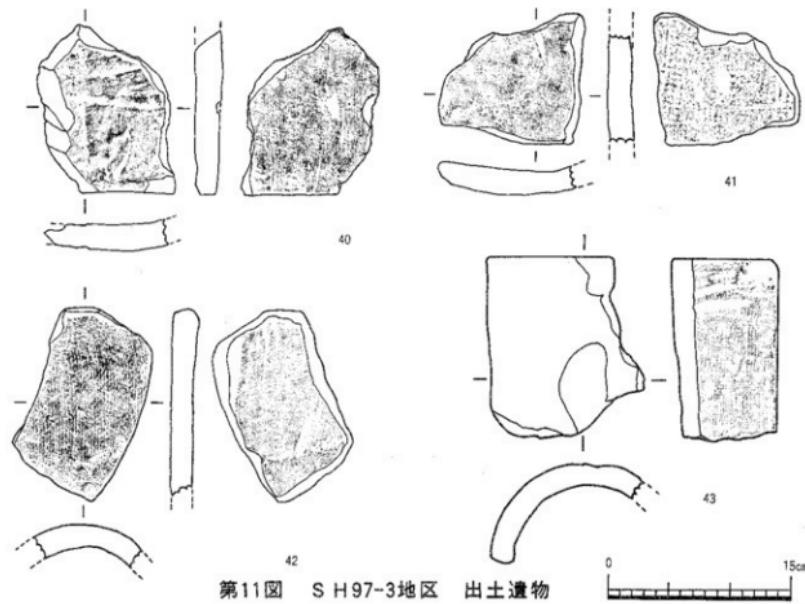
凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は6本・横糸は8



第9図 S H 97-3地区 出土遺物



第10図 SH 97-3地区 出土遺物



第11図 S H 97-3地区 出土遺物

本である。凸面には一辺約5mmの斜格子叩き痕がみられる。落ち込みから出土。

第10図-38（図版8-38） 四面には布目痕がみられる。凸面には一辺約2cmの斜格子叩き痕がみられる。落ち込みから出土。

第10図-39 四面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は8本・横糸は10本である。凸面には一辺約1.5cmの斜格子叩き痕がみられる。土坑1から出土。

第11図-40 四面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は12本・横糸は11本である。凸面は叩き痕をヘラ状工具の様なもので消している。落ち込みから出土。

第11図-41 四面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は9本・横糸は9本である。凸面には一辺約5mmの正格子が叩き痕がみられる。また叩き痕を消すように刃と思われる種子の圧痕がある。落ち込みから出土。

丸瓦

第11図-42（図版8-42） 凸面には繩の幅が約2mmの繩目叩き痕がみられる。凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は11本・横糸は9本である。落ち込み出土。

第11図-43（図版8-43） 凸面にはナデ調整が施されている。凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は8本・横糸は7本である。溝2から出土。

埠

第9図-29~31（図版6-29~31） 墓である。29は厚さ3.2cm、30は厚さ5.2cm、31は厚さ4.2cmである。落ち込みから出土。

第3節 SH97-4・SH97-5地区の発掘調査（第12～16図・図版4・7・8）

現状は水田であったが、府道敷きまで盛土を行い宅地造成が計画された。宅地予定地（SH97-4地区）は盛土が厚く遺跡の破壊はないが、基本層序と西側で検出されている遺構との関連を確認するために国庫補助事業としてトレンチ調査を行った。また周囲の擁壁予定地（SH97-5地区）は遺跡を破壊するため、原因者負担で発掘調査を行った。

（1）基本層序（第12・13図）

SH97-4地区は、約20～30cmの耕土・約5～10cmの床土を除去すると、11層に分かれる約5～30cmの遺物包含層が堆積し、その下層の地山（しまりの強い灰黄色粗砂・しまりの強い褐色砂質土・橙色砂礫）が遺構面であった。

SH97-5地区は、約10～20cmの耕土・約5～10cmの床土を除去すると、28層に分かれる約10cm～1.3mの遺物包含層が堆積し、その下層の地山（しまりの強い灰オリーブ色粗砂・しまりの強い明黄褐色粗砂）が遺構面であった。

（2）遺構

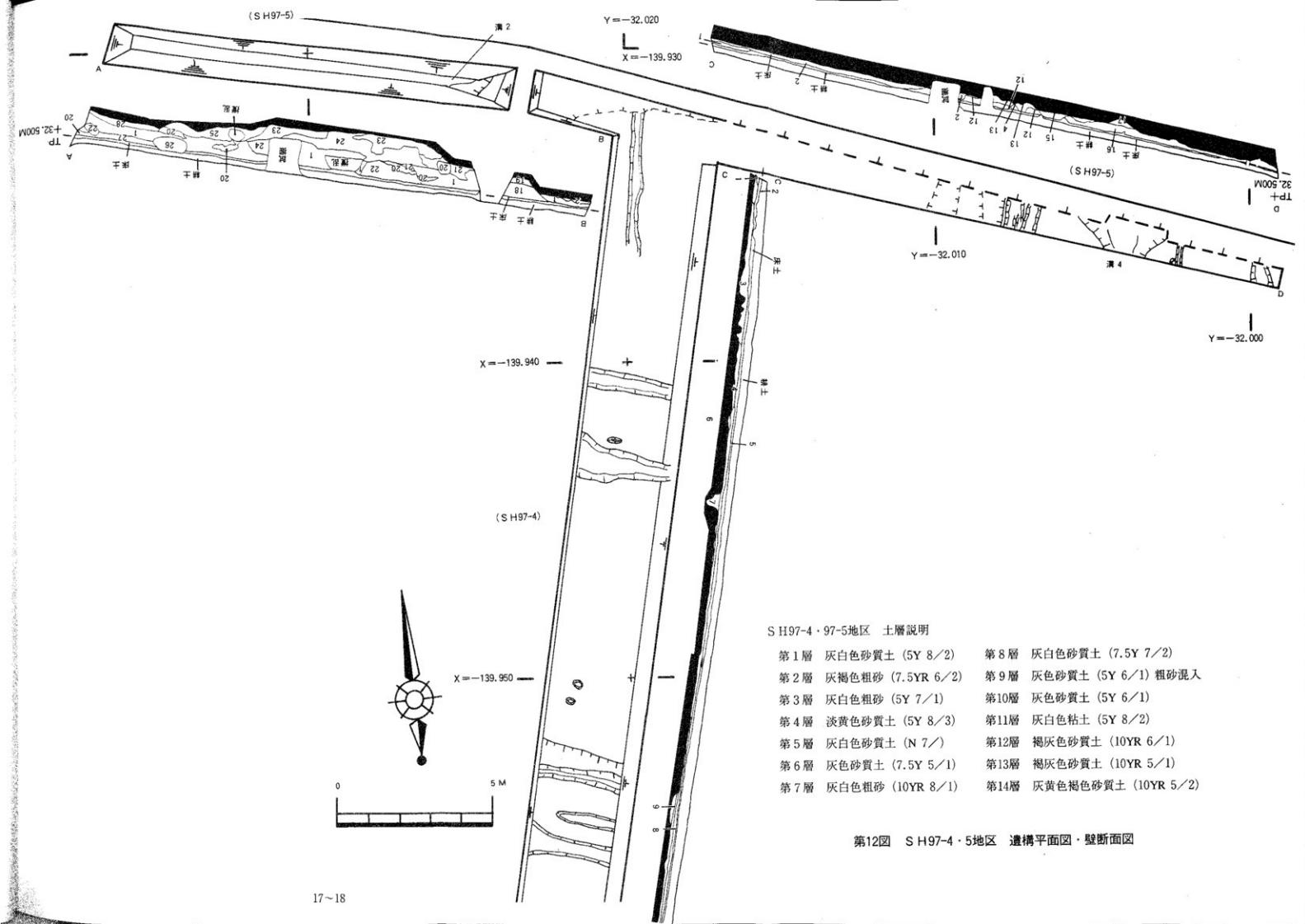
SH97-4地区（第12・13図・図版4）

敷地のほぼ中央に長さ約53m・幅約3.5mの南北方向のトレンチを設定し調査を行った結果、幅約40cm～1.8mの東西方向の溝14本・幅約40cm・長さ約4.5mの南北方向の溝1本・ピット3基・土坑2基を検出した。この敷地の西側の府道敷きを大阪府教育委員会が発掘調査した結果では、乱石積みの基壇をはじめ掘立柱建物跡2棟や「正方寺」と墨書きされた10世紀前半の土師器が出土した土坑・ピット・溝など多くの遺構が検出されている。しかし約25m東側のこの地域付近では、上記のように遺構の密度が低くなっている。それぞれの遺構からは、時期が確定できるような遺物は出土していない。

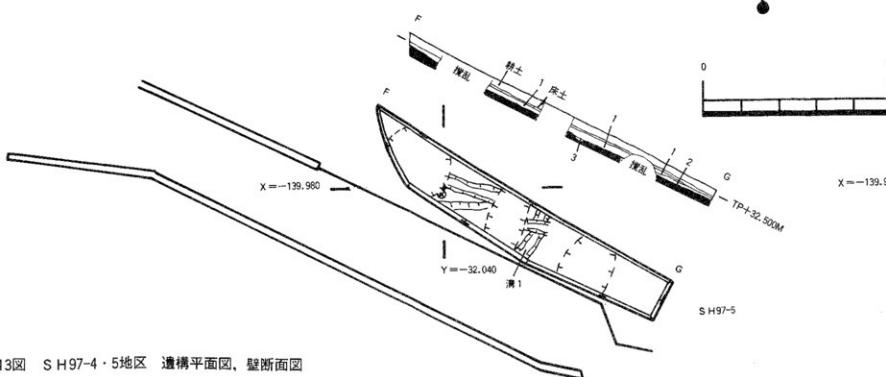
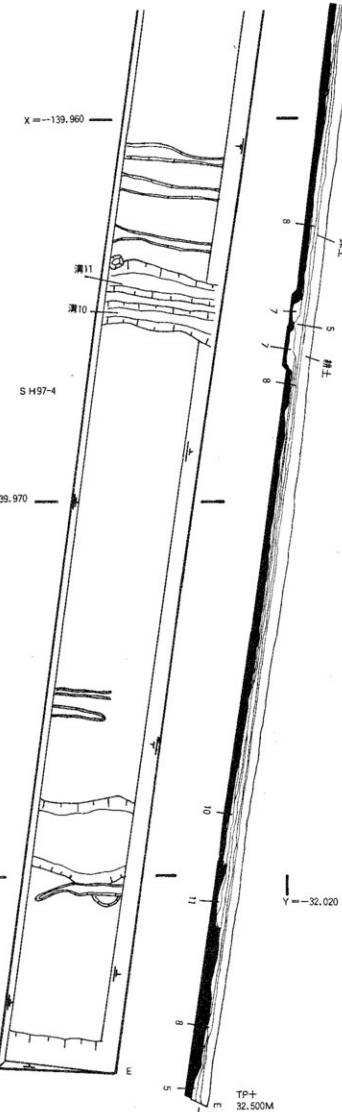
SH97-5地区（第12・13図・図版4）

開発予定地の北端と南端の擁壁建設予定地で調査を行った。北側は長さ約39m・幅約1.5mの東西方向のトレンチ、南側は長さ約9m・幅約1.5mの東西方向のトレンチを設定した。

北側地区においては、遺構の一部が北隣にある東西方向の水路を掘削した際に破壊されている。この地区的遺構としては、幅約20～50cmの南北方向の溝5本・幅約1.3～3mの南北方向の溝1本・ピット1基を検出した。またトレンチの西側においては、地山が約1m程西側へ向かって削り込まれており、堆積土の状況から人為的に埋めたものと思われる。



第15層	淡黄色粘土 (5Y 8/3)
第16層	浅黄色砂質土 (5Y 7/3)
第17層	浅黄色粗砂 (5Y 7/3)
第18層	灰白色砂質土 (N 7/)
第19層	淡黄色粘土 (5Y 8/4)
第20層	青灰色砂質土 (5B 6/1)
第21層	黃灰色粗砂 (2.5Y 5/1)
第22層	灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
第23層	灰色シルト (5Y 5/1)
第24層	浅黄色砂質土 (5Y 7/4)
第25層	褐灰色砂質土 (10YR 4/1)
第26層	淡黄色粘土 (2.5Y 8/3)
第27層	浅黄色砂質土 (2.5Y 7/4)
第28層	黑褐色砂質土 (2.5Y 3/1)



第13図 SH97-4・5地区 遺構平面図、壁断面図

(3) 遺物

◇土器類（第14図・図版7）

ほとんどの土器類が包含層からの出土である。図示できたもの以外にも中世から近世のものが出土している。

須恵器

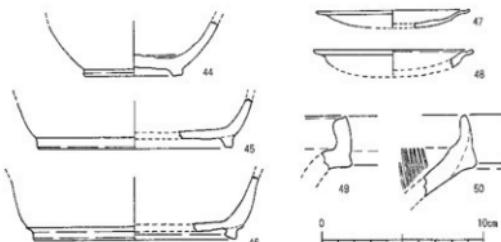
高台付き壺（第14図-44・

図版7-44）復元底径6cm

の小片である。胎土は密である。

坏（第14図-45・図版7-45）復元底径12.2cmの小片である。胎土は密である。

坏（第14図-46・図版7-46）復元底径12.4cmの小片である。胎土は密である。



第14図 S H 97-5地区 出土遺物

土器器

皿（第14図-47・図版7-47）いわゆる「ての字」状口縁の皿である。復元口径9.6cm・推定器高1.2cm・厚さ約3mmの小片である。

皿（第14図-48・図版7-48）いわゆる「ての字」状口縁の皿である。復元口径10cm・推定器高1.7cm・厚さ約4mmの小片である。溝1から出土。

陶器

摺り鉢（第14図-49・図版7-49）摺り鉢の口縁部の小片である。備前焼。

摺り鉢（第14図-50・図版7-50）摺り鉢の口縁部の小片である。

◇瓦類（第15・16図・図版7・8）

今回の調査では遺物のはほとんどが瓦類であった。その多くは包含層からの出土であり、平瓦が多数をしめ、丸瓦は少量、軒丸瓦は1点出土した。平瓦に使用された叩き具は数種類ありそれぞれの事例を図示した。そのほか埠が2点出土している。

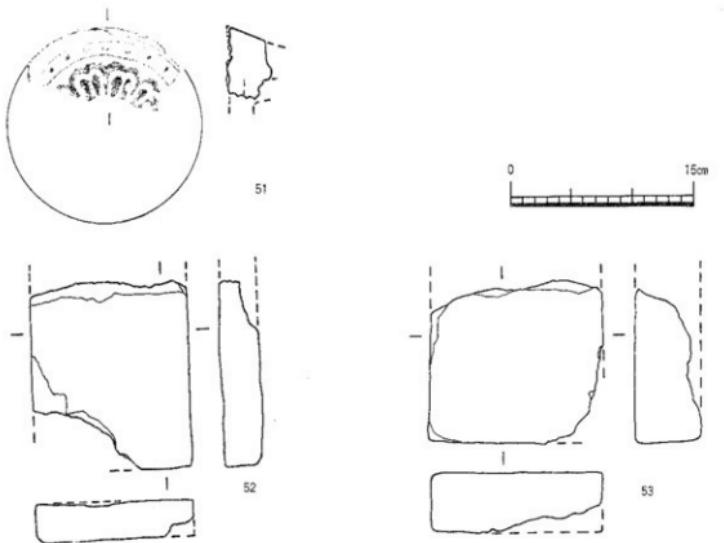
軒丸瓦

第15図-51（図版7-51）複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部である。外圈には珠文が巡っている。瓦当部の復元直径は16cm、厚さは2.6cmである。

平瓦

第16図-54（図版8-54）凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は8本・横糸は8本である。凸面には繩の幅が約3mmの縄目叩き痕がみられる。凹面の一部にはカキメ状の痕がみられる。溝11から出土。

第16図-55 凹面には布目痕がみられる。凸面には繩の幅が約3mmの縄目叩き痕がみられる。溝11から出土。



第15図 SH97-4・5地区 出土遺物

第16図-56（図版8-56） 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は8本・横糸は9本である。凸面には縄の幅が約3mmと4.5mmの縄目叩き痕がみられる。溝2から出土。

第16図-57 凹面には布目痕がみられる。凸面には一辺約5mmの正格子叩き痕がみられる。

第16図-58（図版8-58） 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は5本・横糸は8本である。凸面には一辺約5mmの斜格子叩き痕がみられる。溝11から出土。

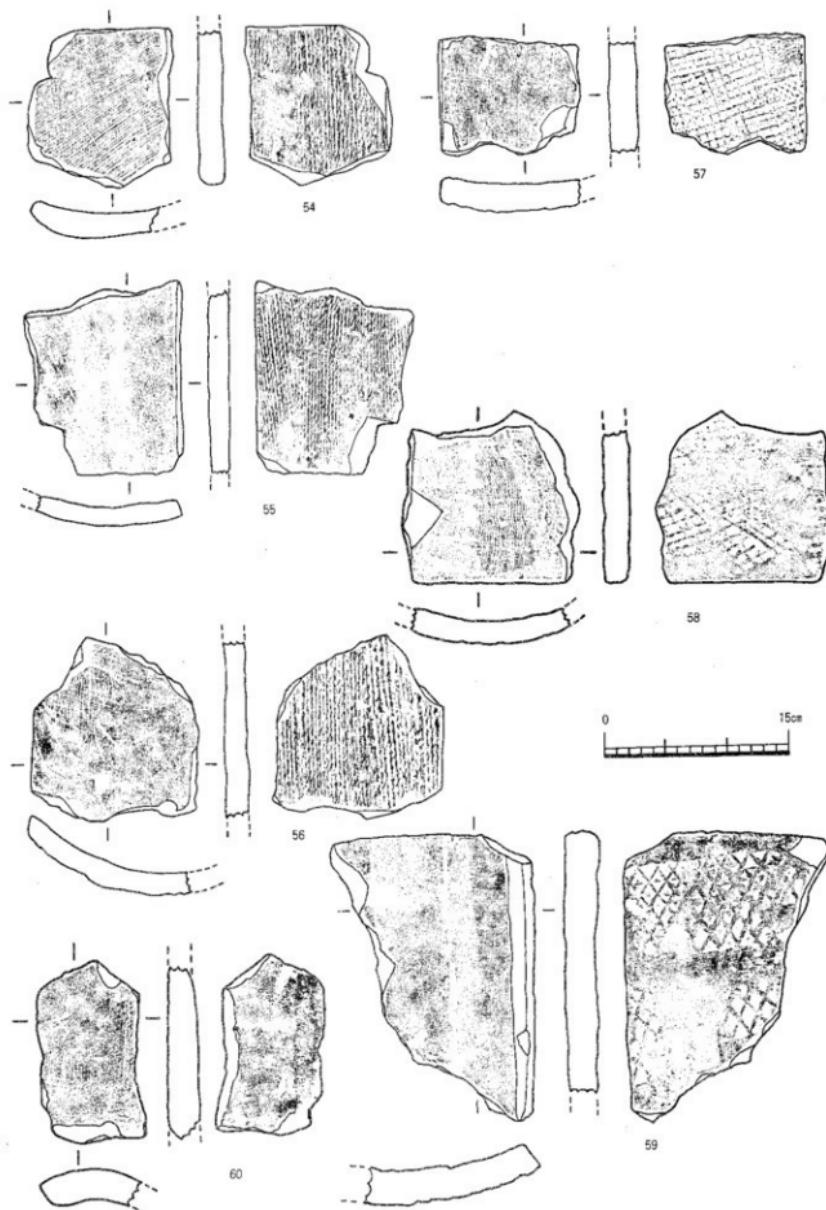
第16図-59（図版8-59） 凹面には布目痕がみられ、1cm四方内の縦糸は10本・横糸は10本である。凸面には一辺約1.5cmの斜格子叩き痕がみられる。

丸 瓦

第16図-60 凹面には縄目叩き痕がみられる。凸面には布目痕がみられる。
溝11から出土。

博

第15図-52・53（図版7-52・53） 博である。52は厚さ3cm、溝4から出土。53は厚さ5cm、溝10から出土。



第16図 S H97-4・5地区 出土遺物

第3章 まとめ

今回の発掘調査は正法寺跡内の3箇所において、基本層序と周辺地区で確認された遺構との関連を確認するために、国庫補助事業として各地区にトレンチを設定して行うとともに、宅地造成にともなう擁壁建設工事により遺跡を破壊するところについては、原因者の負担により行った。以下に総括してまとめとしたい。

S H97-1とS H97-2の地区は、前回の概要報告書によると正法寺の寺域の外側にあたる。S H97-1地区においては、前回と前々回の調査で確認されている溝とピットの続きを確認した。溝については粗砂の堆積がみられ、形態も不規則なことから自然のものと思われる。S H97-2地区の北側トレンチにおいては、前回の調査で確認されている斜面の続きを検出した。これは正法寺が立地する段丘の北端にあたると考えられる。西側トレンチにおいては、西側の半分が近世以降の造成で削平されていることがわかった。遺物については、S H97-1地区の溝から奈良時代のものと思われる須恵器片・土師器塊・土師器坏のほか、包含層から須恵器片が数点出土している。瓦類については前回の調査と同様に小片が数点出土しているのみである。垣

S H97-3地区は、正法寺が立地する段丘の南端にあたる。南側の東西方向トレンチにおいては、その南東側で前回と前々回の調査で確認されている落ち込みを検出した。ただし、東側からほぼ直線的に西へ延びてきている落ち込みの肩部が、このトレンチ内で弧を描くようにその方向を南へ変えている。このことについては、狭い調査範囲のなかのことであるため確実なことはいえないが、前回の調査においてこの落ち込みの南側にみられた比高差5mほどの崖が、近代以降に現在のような地形に整地されたものであり、本来の段丘の南側はこの落ち込みであることや四條畷市教育委員会が、今回の調査地区の西隣に位置している中門跡と推定されている「午塚」の西側において昭和51年度にトレンチ調査を実施した際に、その基壇跡と思われる土層を確認していることから、この南へ向かっている落ち込みの肩部は、そのまま緩やかな傾斜をもって真っすぐに南へ延びて行き、それがこの段丘の南側を東西に通じている清滝街道から正法寺へ向かうための道筋の東側にあたるのではないかと推測する。この落ち込みからは奈良時代のものと思われる軒丸瓦や軒平瓦とともに多くの平瓦や埴が出土している。

S H97-4とS H97-5の地区は、伽藍の中心と想定されているところから東へ約50m付近である。この地区においては、第2章第3節で述べたように耕土・床土下の包含層は薄くその下層は地山であった。遺構としては、伽藍の中心から外れているためか数本の溝などを検出したのみでその密度は低い。S H97-5地区の北側トレンチの西側では、地山を約1m程掘り込んでいた肩部を確認した。全容は明らかではないが堆積土の状況から人為的に埋めたものである。前回の概要報告書によるとこの付近が寺域の北端としている。

今回出土した遺物については、その大半が瓦類であり、土器類は奈良時代から平安時代の須

恵器・土師器と中世の陶磁器が主なものであった。

瓦類についてはそのほとんどが平瓦であった。軒丸瓦は、単弁蓮華文が2種類・2点、複弁蓮華文が3種類・4点出土しており、奈良時代（以前と思われるものもある）のものと思われる。軒平瓦は、奈良時代の均整唐草文のものが1点出土している。出土した瓦類で多数を占めている平瓦については、本文中で述べたように凸面に叩きが施されていた。その叩きは、大きく繩目と格子の2種類に分類できる。今回は、それぞれの叩きについてさらに細分を試みた。繩目の叩きについては、1本の繩の幅を計測し分類したところ、2mm～5mmの6種類に分類できた。微妙な幅の違いについては、叩き締めの際に力を入れる具合によって生じることも考えられるが、明らかに幅の違うものがあることから数種類の叩き具によったものであることがわかる。また1点だけであったが、左（反時計回り）に撲った繩を巻いた叩き具を使ったものもみられた。格子の叩きについては、一辺が5mmの正格子のものと斜格子のものがあり、斜格子のものは一辺が5mm・1.5cm・2cmの3種類に分類できた。

今回の調査地区は、伽藍の中心から外れていることもあって主だった遺構の検出はなかったが、遺構の広がりの在り方や南端部の地形の状況、基本層序を知ることができた。

報告書抄録

ふりがな	しょうほうじあと・おおがみいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要報告書
シリーズ名	四條畷市埋蔵文化調査報告
編著者名	野島 稔・村上 始
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL0720-77-2121
発行日	1999年（平成11年）3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在 地	コード 市町村	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
しょうほうじあと 正法寺跡 (SH97-1-97-2)	しじょうなわてし 四條畷市 よたき 清瀧地内	272299	34° 44' 17"	135° 38' 59"	平成9年12月 10日～ 平成9年12月 25日	(SH97-1) 36m ² (SH97-2) 80m ²	宅地造成
しょうほうじあと 正法寺跡 (SH97-3)	しじょうなわてし 四條畷市 よたき 清瀧地内	272299	34° 44' 12"	135° 38' 58"	平成10年1月 6日～ 平成10年1月 14日	76m ²	保育所建設
しょうほうじあと 正法寺跡 (SH97-4-97-5)	しじょうなわてし 四條畷市 よたき 清瀧地内	272299	34° 44' 15"	135° 39' 00"	平成10年1月 27日 平成10年2月 4日	(SH97-4) 185m ² (SH97-5) 107m ²	宅地造成
おほがみいせき 大上遺跡 OG98-1 OG98-3	しじょうなわてし 四條畷市 よたき 清瀧地内	272299	34° 44' 08"	135° 39' 09"	平成10年11月 11日～11月13日 平成11年2月 9日～2月13日	40m ²	個人住宅 擁壁造成

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
正法寺跡 (SH97-1-97-2)	寺	奈良時代	溝・ピット・ 土坑	須恵器・土師器・ 瓦	
正法寺跡 (SH97-3)	寺	奈良時代 ～中世	落ち込み・溝 ・土坑	土師器・青磁・白 磁・鉄釘・瓦・埠	
正法寺跡 (SH97-4-97-5)	寺	奈良時代 ～中世	溝	須恵器・土師器・ 陶器・瓦・埠	
大上遺跡	集落 古墳	縄文時代 古墳時代	土坑・Pit・ 集石土坑 溝・Pit	縄文土器・石錐・ 石錐 円筒埴輪・須恵器 ・土師器	

第4章 大上遺跡 歴史的環境と調査の成果

大上遺跡は、四條駿小学校の東方に位置する。昭和55年の宅地開発に伴う試掘調査によって古墳時代の土器片が出土した。この土地の小字名から大上遺跡と命名し、文化庁に遺跡発見届出が行われた遺跡である。

大上遺跡は、約300mの範囲が周知遺跡として遺跡分布地図に記載され、これまでに数次の調査がおこなわれている。平成4年の携帯電話サービス無線鉄塔の工事に伴う調査では直径19.4mと推定される円墳の東側部分が検出され、墳丘部はすでに破壊されていたが周濠内に長さ2.75m・幅1.2m・深さ0.6mの長方形の埋葬施設が検出され、その中から人骨及び玉類が多量に出土している。この地域は古墳時代の集落跡と古墳群として紹介しておきたい。

その後の調査では縄文時代早期の押形文土器や縄文時代後期の土器・石器が出土し、また奈良時代の掘立柱建物跡や土坑などが発見されている。

今回の調査は大上遺跡の東端に位置する四條駿市大字清瀧493-2に位置し、浦川秀一氏より個人住宅に伴う埋蔵文化財届け出があった。その内容は、市道清瀧中町1号線新道建設に伴い浦川秀一邸が移転となり、この住宅の西側に接する水田地に盛土による二階建物が予定された。しかし、南側及び北側・西側に隣地との区画のための擁壁部分が届出の中に記載されていたため試掘調査を実施した。その結果、南側擁壁部分に遺物包含層及び遺構を検出したため発掘調査を実施した。擁壁工事に伴う発掘調査範囲は長さ約24.5m・幅1.6mの約40m²である。擁壁工事の都合上南側擁壁西側調査区と東側調査区にわけて調査をした。

南側擁壁西側調査区

この調査区には2箇所の試掘穴を設定した。第1試掘穴で直径1.6mの土坑、第2試掘穴で0.5mの柱穴を検出したため、長さ14.5m・幅1.6~1.8mを拡張した。その結果、古墳時代の溝及び柱穴、縄文時代後期の土坑等を検出した。古墳時代の溝は幅3mを超えるものと推定されることから、今回の調査区からすぐ南側から検出している前方後円墳・円墳など三基の古墳との関わりからこの溝も古墳に伴うものと考えられる。しかし、幅1.2~1.6mの範囲内であるため円墳であるのか前方後円墳であるのか不明である。この周濠の西側に接する場所から鉄刀及び刀子が出土している。周濠の検出面の高さはTP+42.87m、周濠の下層面の高さはTP+42.47mで、約40cmの深さを確認した。鉄刀の位置の高さはTP+42.84mで、刀子の位置の高さはTP+42.77mであった。

古墳時代の柱穴は、直径約50cm・深さ16cm~直径1.1m・深さ40cmのものを12箇所検出している。この調査区内の柱の配置から建物の規模を推定することは不可能であった。Pit No 1、直径60cm・深さ30cmの柱穴は、根石を敷いた状態で検出した。またPit No 8、直径1.2m・深さ

42cmの柱穴は、不整形である。そのPtNa 8 内から縄文時代後期の中津式土器が出土した。この遺構は調査区の北側にも広がるもので、土坑の可能性がある。

南側調査区の北側断面基本層序は、第1層耕土、約20cm。第2層床土、約10cm。第3層にぶい黄橙色砂質土10YR 7／2、約10cm。東側は古墳時代の柱穴遺構検出面であるが、西側の方は第4層にぶい黄橙色砂質土10YR 5／3、約10cmの下層で遺構検出面となる。

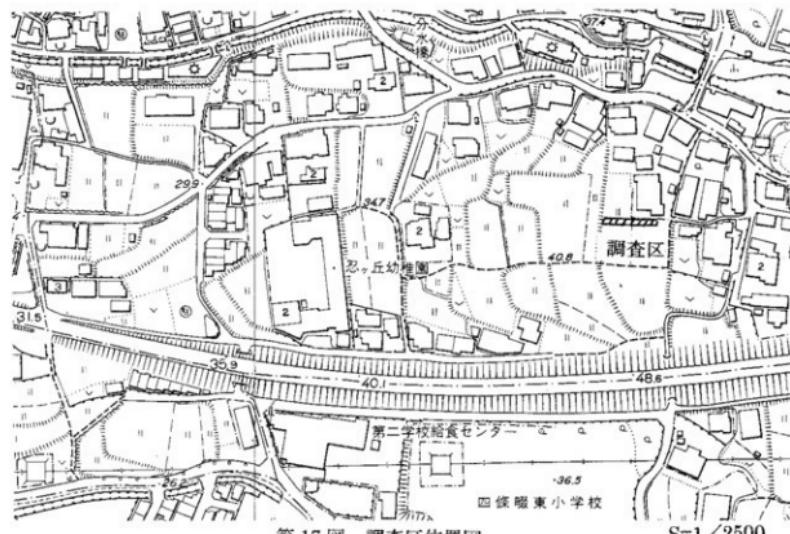
南側擁壁 東側調査区

地山直上の灰黄褐色砂質土10YR 6／2、その下から南北方向の鋤溝22条以上を確認した。鋤溝の規模は幅15cm・深さ2cm～幅45cm・深さ6cmで、溝の中には二股を呈するものもある。鋤溝内から土器は全く出土していないが、灰黄褐色砂質土内から土師器片が出土している。

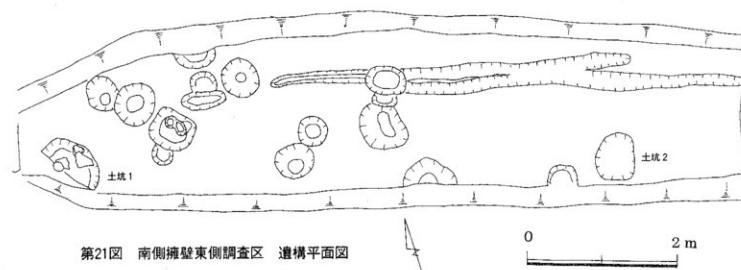
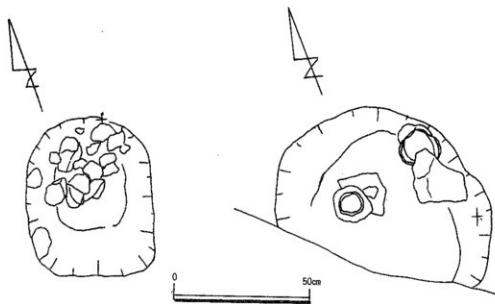
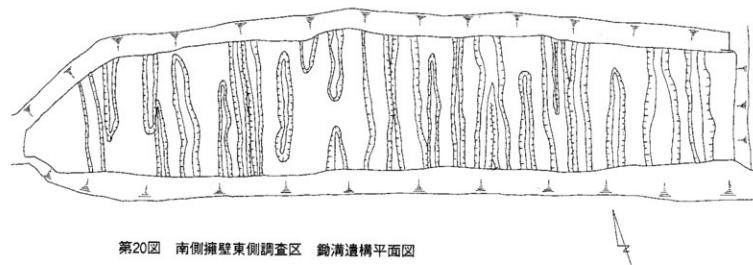
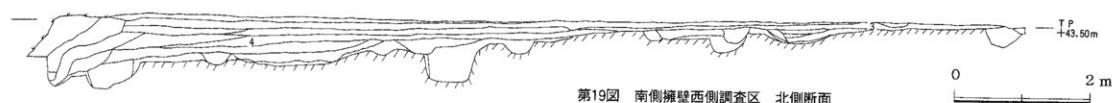
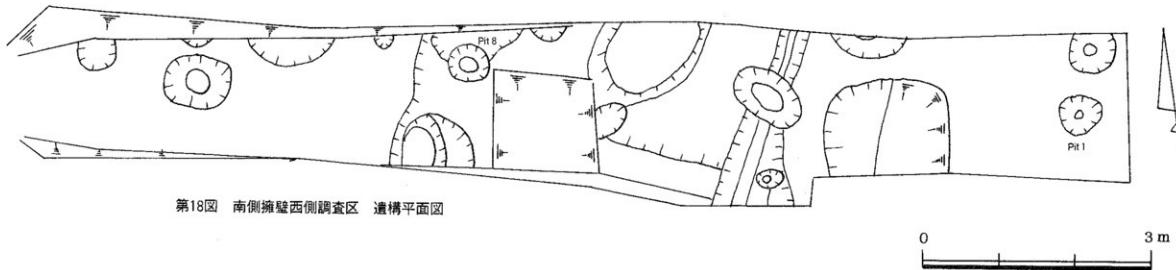
この鋤溝の下層から土坑・石敷き遺構・柱穴・溝などが検出された。東側調査区の南西隅で検出した直径90cm深さ23cmの土坑1内から縄文時代後期の小型深鉢と底部が出土した。この底部外面には弥生時代に見られる木葉痕がつけられている。

調査区東南隅に検出した長辺60cm・短辺48cm・深さ13cmの土坑内から、8cm～13cmの花崗岩が18個検出された。この花崗岩は赤色を呈し火を受けているものと考えられる。

その他の柱穴から、古墳時代の須恵器および土師器片と馬齒が出土した。

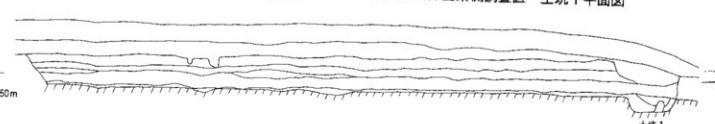


第17図 調査区位置図



第22図 南側擁壁東側調査区 土坑 2 平面図

第23図 南側擁壁東側調査区 土坑 1 平面図



第24図 南側擁壁東側調査区 南側断面図

出土遺物

南側擁壁西側調査区 PitNo.8 (第25図-2・3) 繩文時代後期中津式土器が出土している。

第25図-2 口径24.4cm・現存高9.2cmである。波状口縁をもつ中津式深鉢の口縁部である。中津式特有の磨消繩文が施され、口縁端波頭部に $5 \times 3.5\text{mm}$ ・深さ5mmの指円形の円孔を持つものである。内面は丁寧なヘラミガキが施されている。色調は褐色である。

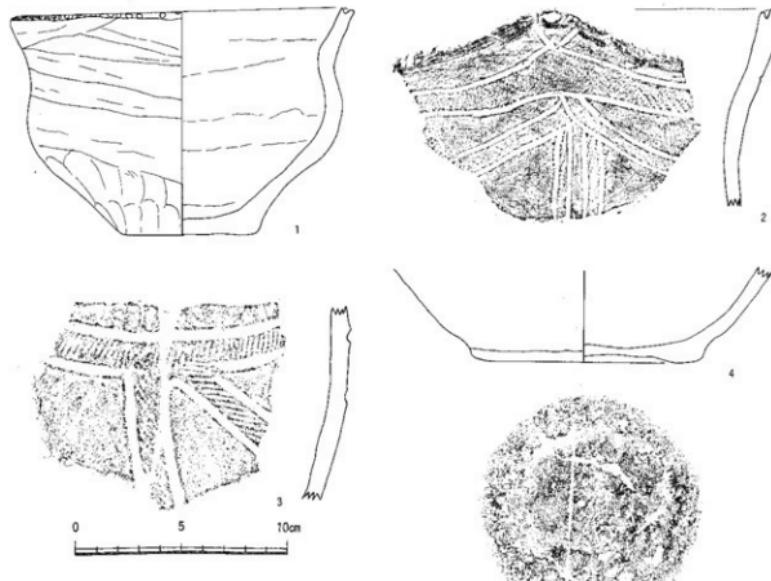
第25図-3 中津式深鉢の胴部片である。中津式特有の磨消繩文が施されている。繩文部を区画する沈線は、2にくらべ広く深いものである。口径の復元是不可能であるが2よりもかなり大きいと思われる。内面は縱にヘラ削りされ、その後ナデ調整されている。色調は黄橙色である。

南側擁壁西側調査区 Pit 12 繩文時代土器とともに石錐が出土している。石錐は長さ8.1cm・幅5.6cmの指円形である。長辺両端を打ち欠いている。

南側擁壁東側調査区土坑1 (第25図-1・4) 繩文時代土器が出土している。

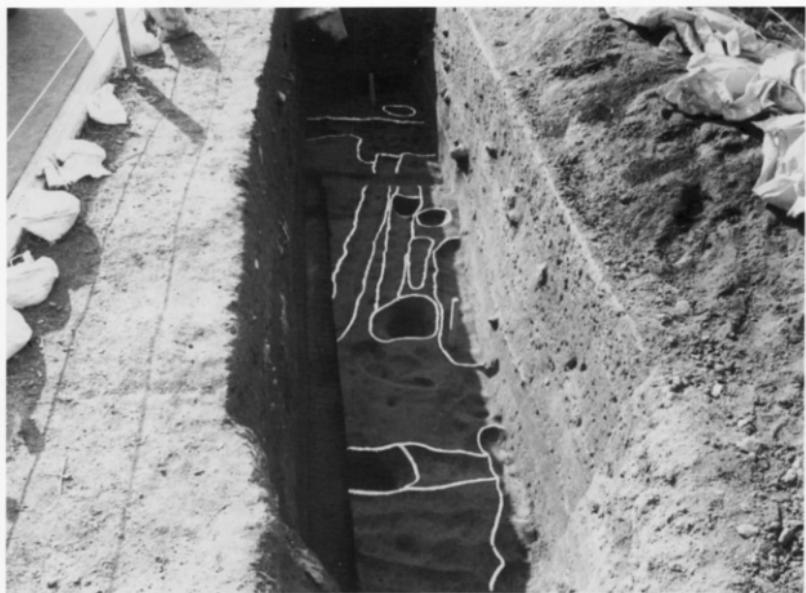
第25図-1 小型深鉢。口縁の一部を欠いているがほぼ完形である。口縁端部に刺突を施しているが、この刺突以外の装飾は施されていない。外内面ともに粘土紐接合痕・指圧痕が見られ、砂粒を含む。色調は淡褐色である。他には粗製の大型深鉢片が出土している。

第25図-4 深鉢底部。底部から広く丸みをもって立ちあがるものである。高さ4.4cm・底部直径11cmである。底部外面に木葉痕が認められる。色調は淡褐色で砂粒を多く含む。



第25図 南側擁壁・西側調査区・東側調査区 出土遺物

図 版



1 遺構全景（宅地予定地）（北から）



2 遺構全景（宅地予定地）（北から）



1 遺構全景（擁壁予定地）（南から）



2 遺構全景（擁壁予定地）（北から）



1 遺構全景（南から）



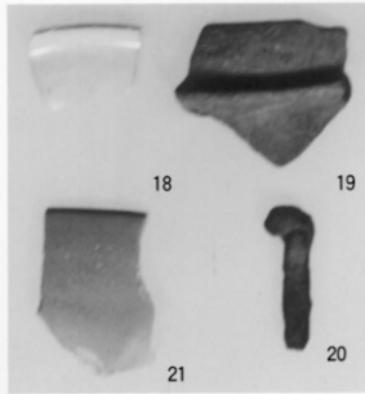
2 落ち込み全景（南から）

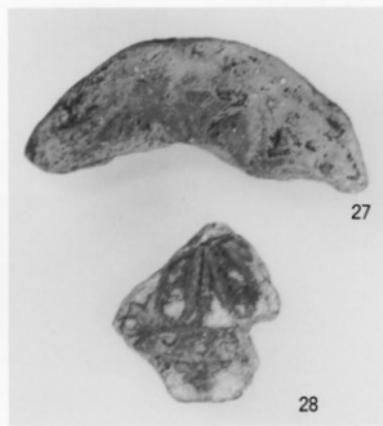


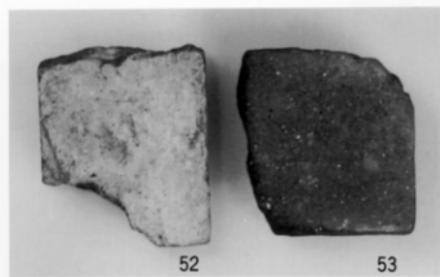
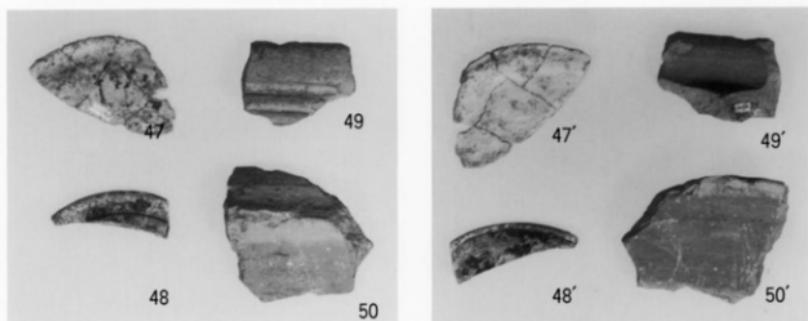
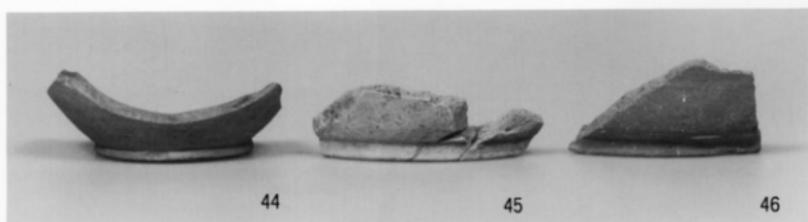
1 遺構全景（宅地予定地）（北から）

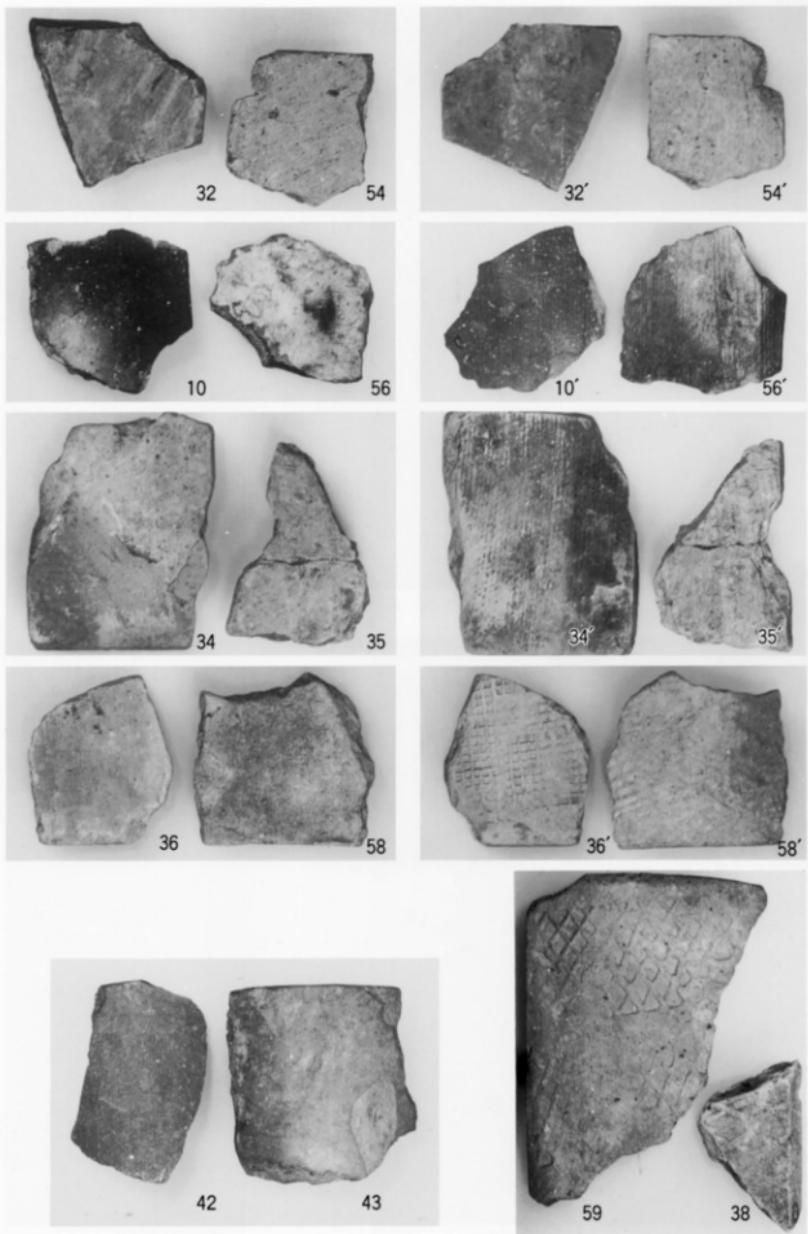


2 遺構全景（擁壁予定地）（西から）











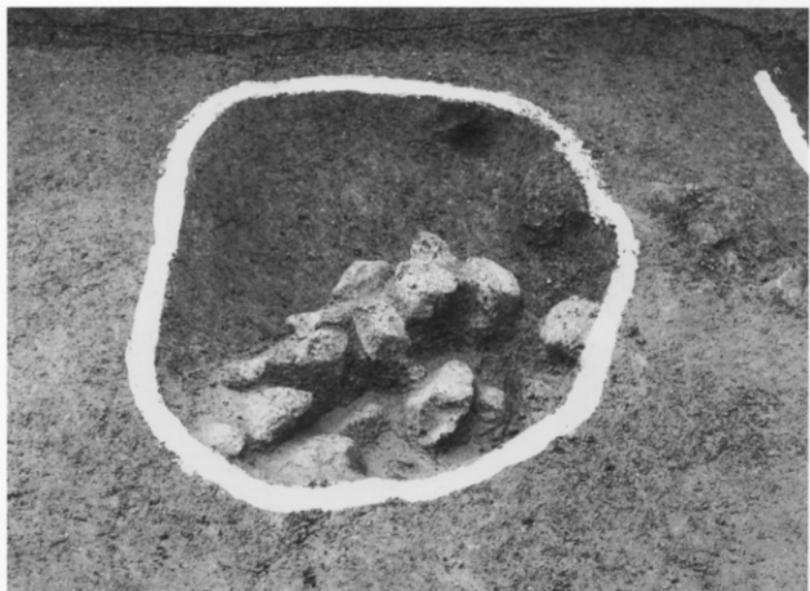
調査スナップ



調査区全景



土坑 1 検出状況



土坑 2 植出状況



1



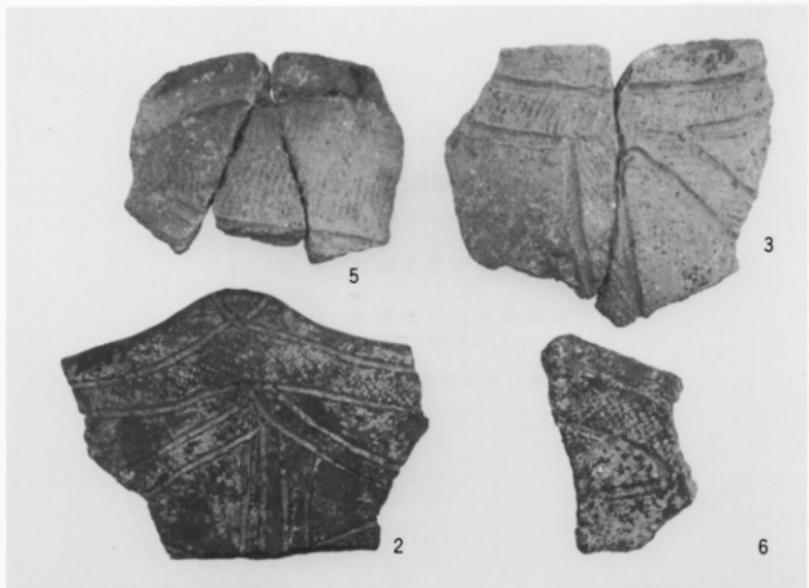
4



1'



4'



2



3



6

東側擁壁・西側調査区・東側調査区 出土遺物

正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要

平成11年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1-1

印刷 加地企画印刷株式会社